

チャイロマルハタの親魚養成と産卵

岩井憲司・仲盛淳・金城清昭・仲原英盛・立津政志・小濱健徳

1. 目的

チャイロマルハタの親魚を養成し、種苗生産に必要な卵を確保する。

2. 方法

親魚は、平成4年度に羽地内海で捕獲され当センターで養成を継続している15尾を採卵対象群とした。親魚は5月24日に生け簀から陸上水槽（100t）へ輸送し、10月2日までの約4ヵ月間陸上水槽で養成した。陸上水槽では輸送時から6月16日までの期間、飼育水を26℃に加温して親魚を養成した。

銅イオン発生装置を用いて、白点病やハダムシ寄生等の予防を適宜行った。飼育水中の銅イオン濃度は30～50ppmを目安とした。

餌料は週3回、DHAを添加した冷凍ムロアジを主に冷凍イカを適時組み合わせて飽食量給餌した。

3. 結果及び考察

採卵量と飼育水温の推移を図1に示す。産卵は5月28日から7月24日までの期間に計17日間、3回のピークを持って確認された。採卵した総量29,785gで、浮上卵は11,134g、沈下卵は18,651gであった。平均卵径は0.84～0.93mmであった。各ピーク時毎の採卵量と平均卵径を比較すると、1回目のピーク時が採卵量も多く、卵径も大きい傾向がみられた（表1）。昨年度の9月以降に採卵された卵の平均卵径は0.869mmであったことから、産卵期間が続く

に伴い卵径は小型する傾向があると考えられる（仲盛 2008）。

表1 チャイロマルハタの各ピーク時における産卵量と平均卵径

ピーク(期間)	採卵 日数	卵量(g)			平均卵径 (mm)
		浮上卵	沈下卵	総採卵量	
1回目(5/28-6/8)	6	6,375	13,508	19,883	0.91
2回目(6/26-7/4)	4	886	1,571	2,457	0.88
3回目(7/17-7/24)	7	3,873	3,572	7,445	0.88

6月2日の採卵群は水産海洋研究センター石垣支所に空輸して、先方で種苗生産に用いた。6月30日及び7月20日の採卵群は当センターで種苗生産に用いた。種苗生産の成績は1回目のピーク時で採卵した群が好成績あったことも含め、早い時期に採卵した卵を種苗生産に用いる方が良いと考えられる。

産卵は、1回目と2回目のピークでは満月の前後の期間で行われ、3回目では上弦の前後の期間で行われた。今年度の採卵では、過去に報告されているような下弦から新月までの期間で行われる産卵周期性はみられなかった（木村ほか, 2008）。

4. 文献

- 仲盛淳. ヤイトハタ及びチャイロマルハタ親魚の採卵. 平成18年度沖縄県栽培漁業センター事業報告書. 2008: 44-46.
- 木村基文, 井上顕, 知名真智子(旧姓金田), 渡辺利明, 鳩間用一, 上田美加代, 仲原英盛, 濱川薫, 村本世利朝. チャイロマルハタの親魚養成と採卵. 平成17年度沖縄県栽培漁業センター事業報告書. 2008: 49-52.

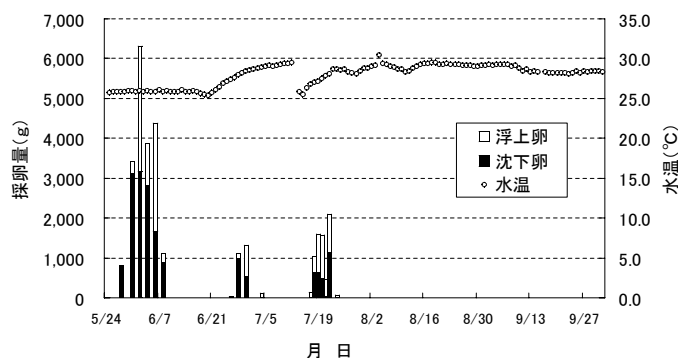


図1 チャイロマルハタの採卵量と飼育水温の推移